

## 小学校6年生の子どもを持つ親の子育て不安

### — 子どもの中学校進学を控えて —

高 橋 愛 子

本研究は、小学校6年生の子どもを持つ親が子どもの中学校進学前に感じる子育て不安を測定し、その不安と不安の背景要因との関連性を検討すること（研究Ⅰ）、進学前に感じた親の不安が、進学後にどのように変化したか、その変化の要因を検討すること（研究Ⅱ）を目的としている。

研究Ⅰでは、子どもの中学校進学前の親の不安尺度を作成し、子どもの成長への認知・感情、養育態度、親自身の不安特性やソーシャルサポートとの関係を、質問紙法により検討した。その結果、進学前の不安要素として、【子どもの人間関係への不安】【勉強面の不安】【中学校生活の構造面の不安】【接し方の不安】があることが確認された。各要因との関連分析の結果、第1子の子どもの親の進学前の不安が高い事、養育態度による違いがある事、親自身の不安特性が大きく影響する事が実証された。ま成長に対する否定的認知・感情は、進学前の不安の全ての要素に影響を及ぼし、これへの対応の重要性が認められた。また、乳幼児期の子育て支援と同様に、この時期の親支援にもソーシャルサポートが重要であることが確認された。

研究Ⅱでは、子どもの進学後の親の不安の変化を、面接調査で得られた語りから検討した。その結果、そのまま継続する不安、自然に解消される不安、新たに発生する不安が認められ、各不安の変化の要素が明らかとなった。子どもの進学後、全ての対象者の成長に対する否定的認知感情が同じまたは増加しており、この時期の子育ての困難さが認められた。思春期は“第二の分離・固体化期”（Blos, 1962）ともいわれ、子どもにとって再び分離不安が生じる時期である。時に退行を示し甘える中で、親の不安感を子どもが感じることは、分離へ踏み出す一步の重荷になりかねない。親への支援により減少可能な不安は進学前に減らしておくことが、両者の新しい環境へのスムーズな移行の一助となると推測できる。具体的な支援策の検討が重要であり、今後の課題となった。

## 「職場」と「家庭」における暗黙の人格観

### -IU & IPU式暗黙の人格観検査から見てきたもの-

佐々木 恵 子

人はそれぞれ他者を認知・評価し、それに基づいて行動をしている。その際、人は科学的な性格理論・パーソナリティ理論を用いているわけではなく、その人の経験に基づいて作られたその人固有の「理論」を有していると考えられる。このような理論は「暗黙の人格観 (Implicit Personality Theory)」(Bruner & Tagiuri, 1954; Cronbach, 1955) とよばれ、研究が重ねられてきた。これまでの暗黙の人格観研究はその共通性を追求する流れと個別性に焦点を当てた研究の流れが主であったが、状況や場面によって変動する可能性が示唆されながらも、同一個人内での状況や場面による暗黙の人格観の違いについては研究されてこなかった。本研究では、個人のもつ暗黙の人格観の中で状況や場面によって変動する部分と一貫した部分を明らかにするため、フォーマルな場として「職場」での、インフォーマルな場として「家庭（家族・親族）」での人間関係に焦点をあて、「IU & IPU 式暗黙の人格観検査」（細江ら, 1995）を用いて、職場および家庭で交流のある人物を評価対象とする暗黙の人格観の比較検討を試みた。その結果、職場場面と家庭場面とで挙げられた特性語を比較したところ、「優しい」「明るい」といった両場面共通に高頻度でみられる特性語がある一方、職場場面においては、多くの人々が一般的に持つとされる対人認知の3次元の中の「社会的望ましさ」に分類される特性語が、家庭場面では「個人的親しみやすさ」に分類される特性語が多く見られ、場面による暗黙の人格観の違いが明らかとなった。また、個人内比較を行ったところ、いずれの場面においても単純な見方をするタイプと、場面によって複雑さが異なるタイプとがあり、認知構造が1～2因子と単純なタイプであっても、場面を通して一貫した共通の判断基準で評価をしているわけではなく、場面によって判断基準を明確に使い分ける傾向が認められた。以上のことは、臨床場面において暗黙の人格観の個別性を検討する際、状況や場面の違いを考慮に入れる必要があることを裏づけるものといえる。